木村拓也フジテレビアナウンサーの

コミュニケーションって“なんだ？”

What is Communication?

過渡期にある教育現場で、新たな「学力」として育成が求められている「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」。多様な人と協働するために欠かせないのがコミュニケーション能力です。ただし、社会に出て実践の場で求められるコミュニケーション能力は、生徒のイメージとは少し異なるかもしれません。一体、コミュニケーションってなんだ？　報道番組で週5日、さまざまな現場を取材し生中継を行う木村拓也さんのお考えを、2回にわたって連載します。ぜひ生徒と一緒に「コミュニケーション」の正体を考えてみてください。

第1回

だから僕はご機嫌でいたい

コミュニケーションは「肯定」から始まる？

「大丈夫かな？」ではなく「よくやった」と言えるか

突然ですが、ちょっと想像してみてください。一日の仕事が終わり、疲れた体を引きずって電車や車に乗り込み、帰宅する瞬間。あなたの心のなかには、どんな言葉が浮かんでいますか？　「あ～、疲れた」「今日もよく働いたよ」「夕飯、何食べようかな」…。考えてみると、私たちは生活のなかでいく度も、なんとはなしに自分に対して言葉をかけているものです。昨日のあなたは、どんな言葉で自分に話しかけましたか。

改めまして、こんにちは。フジテレビアナウンサーの木村拓也です。アナウンサーの僕が「コミュニケーション」と言うと、カメラの前でマイクを持って話しているイメージが真っ先に思い浮かぶでしょうか。あるいは取材をしている場面や、テレビ局のスタッフたちと打ち合わせをしている場面。確かに、誰かと話すこともコミュニケーションの一面ですが、僕が「コミュニケーション」と聞いて真っ先に思い浮かべるのは、朝起きてベッドの上で一人、ぼんやりしている場面や、仕事帰りに電車に揺られている場面です。力まずに一人でリラックスしている時間、自問自答というほどたいしたことではなくとも、僕たちは自分に対して何気なく言葉をかけている。もし心のなかの声も含めて、一日の会話を文字に起こしたら、他者と話すよりも自分と話している量のほうが余程多いかもしれませんね。

やたら「今日の中継、大丈夫だったかな」「うまくいかなかった」と後ろ向きの言葉ばかり浮かぶときは、もしかしたら疲れているのかも。このとき自分に「いやいや、今日もよくがんばった」「えらいよ自分」と言えると、心持ちがだいぶ変わるような気がしませんか？　少し楽になる。ひいては、ありのままの自分を肯定する感覚にもつながっていくかもしれません。

アナウンサーは、多くの人に注目され、お叱りの声を頂くことも多い職業です。それでも心のバランスを保って働くために、僕は自分にかけている言葉を、意識して感じ取るようにしています。そして、できれば自分を肯定するような言葉をかけたい。

だけど自分を褒めようとすると、つい「○○の仕事をやり遂げた」「○○がうまくいった」などと、まるで達成した事実の羅列のようになってしまいませんか。「ただ肯定する」のは、案外難しいものです。自

きむら・たくや●2013年フジテレビ入社。情報・報道番組を中心に担当。『みんなのニュース』のコーナー「上を向いて歩こう！」では、全国で1000回以上の生中継を経験。現在は「Live Newsイット！」アクティブキャスターとして、現場から毎日生中継。TCS認定プロフェッショナルコーチを取得。

取材・文／塚田智恵美　イラスト／桔川シン

他者と話すより、「自分にかける言葉」のほうが多い？

分だけでなく、ほかの誰かに対しても。

みんなで「伝わる」をつくる

僕は今、さまざまなニュースの現場から生中継を行う仕事をしています。飲食店や観光地、スポーツ施設など、あらゆる場所に足を運び、撮影や音声といった技術スタッフ、ディレクターとチームを組んで中継を行う。時には、取材した物や人について視聴者に魅力を伝えたいのだけど、このままでは伝わりにくい状況もあります。

あるときはスイカ農園を取材して、まさに旬を迎えたスイカの魅力を中継で伝えることになりました。丸々と育ったスイカは、それはみずみずしくおいしそうなのですが、スイカ一つをアップで映して僕が情報を読み上げるだけでは、テレビの向こうの人たちに最盛期を迎えたスイカの魅力が伝わらないのではないかと悩みました。

こんなときは「目の前のこの食べ物に、どんな演出をして伝えれば視聴者の方は『おいしそう』と思ってくれるかな？」と考えます。そんな抽象的な問いに対して、みんなでどれだけ汗をかけるかが勝負です。

その場にいるのは、それぞれ役割もキャリアも異なる人たち。まさに「多様な人々と協働して」抽象的な問いに向き合う瞬間。このとき起きがちなのは、〝正解〟をめぐって衝突することです。ほかの人よりも経験の長い人が「私はあのときこんな手法でうまくいったから、こうすべきだ」と過去の成功体験を押しつけてしまったり、「プロとしてこれは譲れない」とそれぞれの役割に固執してしまったりする。でも本来、伝え方に〝正解〟なんてないんです。

たくさんのスイカが隙間なくぎっしりと並んでいる画があれば、今か今かと出荷を待つスイカ農園の様子が臨場感をもって伝わるかもしれない。スイカを置く敷物の色を変えてみては？　スイカに思い切りかぶりついてみてはどうだろう。考えの異なる人たちが集まり、さまざまな方向からアイデアを出せれば、伝える手法の引き出しも広がっていきます。

だから抽象的な問いにチームで向き合うときこそ、それぞれ異なる人たちが考えること、発言したことを、互いに認め合う。それが円滑に現場を回して、やり遂げる力になると思うのです。

自分より若いディレクターと自分の意見がたとえ違ったとしても「発言してくれてありがとう」「あの考え、すごいと思ったよ」と言えるかどうか。お世辞を言う必要はありませんが、あなたのことを「ただ認めている」、そのことを照れずに伝えられる人は、実はあまり多くないのではないでしょうか。でも、自分が言われたら嬉しいですよね。「自分はここで認められている」と思えたら、自然と働くのも楽しくなる。みんなの幸せにもつながります。

褒め上手が多いわけは

コミュニケーション能力や伝える力というと「語彙を磨いて豊かな表現ができるように」「自分の考えを整理し、論理的に相手に伝えるためには」といったことばかりを考えがちです。実は、僕もそうでした。かつては〝巧い〟アナウンサーになりたかった。でも、技術が巧みであることと魅力的であることは違う。高度なことをやっているようでも、チームがギスギスしていたら、その雰囲気が周りに伝わってしまうこともあります。

実際の中継現場では、スイカについて鋭い言葉で描写し、論理的にそのおいしさを説得しようとするよりも、本気でスイカにかぶりついて「おいしい！」と心からの一言を漏らすほうが視聴者に魅力が伝わる、なんてことも往々にして起きる。だったらコミュニケーションって一体なんなんだ？そのことについて考え、日々現場で実践していくなかで僕がつかんだ端緒が、まずは自分に肯定的な言葉をかけて「自分の機嫌を自分でとること」でした。

自分を肯定し、認めることができるからこそ、同じ眼差しを他者にも注ぐことができるのです。相手の考えに賛成か反対か、どの意見を採用するのがベストか、といった話とは別に「あなたをただ認めています」と表現できるようになる。

そう考えてみると、テレビ局で伝える仕事に携わっている人には「褒め上手」が多い気がします。相手のことを認めるための言葉や方法を豊富にもっている。きっと多様な人が協働して、正解のない問いと向き合い続けるために欠かせないのが、まず認め、肯定することなのでしょう。その一歩目は、自分から。

だから僕はご機嫌でいたいのです。